

平和学習

2年生は沖縄への修学旅行が目の前に迫ってきていて、ワクワク・ドキドキが止まらない状態かもしれませんね。先週、全クラス一斉に映画「おかあさんの木」を観賞しました。修学旅行は楽しいばかりではなく、学びの場でもあります。その学びのひとつが、平和について、命について考えることです。知っての通り沖縄は、太平洋戦争において国内で唯一の地上戦があった場所です。そこでは、広島・長崎の原爆や東京をはじめとする都市への空爆とはまた違った戦争の恐ろしさを知ることになるでしょう。80年前に沖縄の人たちが体験した現実に向かってしっかりと目を向け、命の尊さや平和のありがたさを実感してきてくれることを願っています。



給食指導



8日(木) 給食センターの栄養士の方々が来校し、3年生の給食準備の様子を参観し、その後、牛乳の栄養素等の説明をしてくださいました。学校給食で今一番の課題が中学生の牛乳離れです。毎日たくさんの牛乳がそのまま返却されています。これから暑くなってきました。アレルギーの人は絶対に飲んではいけませんが、飲める人はできるだけ飲んで、一日に必要な栄養素を吸収してください。

空海の道 お接待

11日(日) 空海をたどるいやしの道ウォークが開催されました。休憩所である江川湧水源で、参加者を接待するボランティアに本校から3名参加しました。次々と現れる参加者に、ポカリスウェットや麦茶を手際よく渡して、疲れを癒やしていました。今年は天候に恵まれた分、喉が渇いたようで、うれしそうに麦茶を飲んでくれていました。お手伝いお疲れ様でした。



徳島県選手権大会

10日 サッカー 決勝 吉野川SC 1 - 1 (PK2-4) 池田中
準優勝 おめでとうございます

私に戦争の話をさせてください

坂本ユミ子

第66回PHP賞受賞作

12年前、結婚30周年記念に夫と二泊三日で沖縄へ旅行した。写真で見たままの美しい海が私たちを迎えてくれた。夫は初めて、私は二度目の沖縄だった。

最終日の周遊バスツアーで行ったのは平和祈念公園。6月中旬だったが、すでに梅雨明けした沖縄は真夏の太陽が照りつけていた。添乗員さんはいたが、自由散策だった。

バスを降りたところで、20歳ぐらいの若い女性がツアー客に声をかけていた。無地の黒いTシャツに黒のジーンズ。パツと花が咲いたような笑顔で、「ボランティアでガイドをしている知念と申します。よろしければ案内いたします」と言った。私たちは知念さんに案内してもらうことにした。ほかのツアー客もほとんど知念さんについて行った。

ひと通り案内が済んだあと、知念さんがツアー客を集めた。「みなさん、私に時間をください。お話をさせてください。」私と夫は顔を見合わせた。この暑いのに嫌だなと思った。早くクーラーのきいたバスに戻りたかった。「暑い中、申し訳ありませんが、私に戦争の話をさせてください」

知念さんはまっすぐな目で私たちを見つめ、頭を下げた。私は急に自分が恥ずかしくなって、夫とうなずいていた。みんなで彼女を囲むように木陰の芝生に腰を下ろすと、彼女は話し始めた。「ここで戦争があった。米軍が上陸して地上戦になった。逃げ場を失った多くの人々が「バンザイ！」と叫びながら、美しい海に飛び降りて亡くなった。この公園は平和への願いを込めて作られた」一流れる汗をぬぐおうともせず、知念さんは30分も話し続けた。みんな無言で耳を傾けていた。

私は昭和32年、「もはや戦後ではない」と言われた時代に生まれた。中学生のとき、ジローズが歌う「戦争を知らない子どもたち」が流行った。戦争なんて遠い昔のことだ。自分には関係ないと思っていた。初めて沖縄に行ったのは短大の卒業旅行だった。久米島のリゾートホテルに泊まった。無人島へ行ったりグラスボートに乗ったり、沖縄の海を満喫した。本島ではタクシーを一日借り切って、隠れた名所を観光した。ひめゆりの塔にも平和祈念公園にも行かなかった。仲良し4人グループの旅はただただ楽しかった。あのとき、私は知念さんと同じぐらいの年齢だった。

知念さんの話が終わったとき、だれも何も言わなかった。みんな立ち上がり、無言で海を見ていた。夫と私も海を見ていた。泣いている人もいた。私はここから飛び降りて亡くなった人たちに思いをはせた。

悔しかっただろう。悲しかっただろう。怖しかっただろう。

ここで戦争があった。私が生まれる前、何十年も昔の話。知念さんの話は、初めて聞くことばかりだった。私は何も知らなかった。知ろうとしなかった。私には関係ないと思っていたから。今、ここで知れてよかった。多くの人々の命を飲み込んだ沖縄の海は、どこまでも美しかった。「今の気持ちを、忘れないでください」うしろで知念さんの声がした。

那覇空港に向かうバスの中で、一緒に話を聞いた添乗員さんに、「平和祈念公園では、知念さんのような戦争の話をするボランティアのガイドさんが多いのですか？」と尋ねた。

添乗員さんは「戦争経験者のボランティアさんが戦争を語ることがありますが、あんなに若い女性も初めてです。まるで沖縄戦でなくなった人々の魂が宿っているみたいでした」と教えてくれた。戦争体験がない若い知念さんが、なぜ戦争を語るのだろう。ここが沖縄だから？本人に聞けば良かったと後悔した。知念さんのことが一番の旅の思い出になった。

あれ以来、毎年6月になると平和祈念公園でのことを思い出す。どこまでも青く美しい海と知念さんの言葉を。「今の気持ちを、忘れないでください」—忘れてはいない。これからもきっと忘れないだろう。知念さんは今も沖縄を訪れる人たちに「戦争」と「平和」を語り続けているのだろう。

この先も日本の子どもたちが「戦争を知らない子どもたち」であり続けてほしいと願う。